～「日本財団 みらいの福祉施設建築プロジェクト」の審査委員による講評～

■古谷誠章委員長（建築家　早稲田大学 教授 NASCA 代表）

高低差のある敷地全体を緑あふれる丘にして、その中に放課後等デイサービス、みんなの家、居住支援事業施設などを有機的に分散配置する計画。既設の舗装をはがして積極的に緑化し、果樹などに囲まれたオーガニックな環境を生み出そうとしている。敷地に生まれる多様な場所のすべてが遊びの場所、学びの場所となる構想はユニークである。

■栃澤麻利委員（建築家　株式会社 SALHAUS 代表取締役　芝浦工業大学、東京電機大学 非常勤講師　法政大学 兼任講師）

高低差のある敷地を繋ぎながら、豊かなランドスケープにより障がいをもつ子どもたちと大学生、地域との交流を促そうとする提案で、大変魅力的な計画です。放課後等デイサービスの室内活動スペースが豊かな屋外空間と直接つながるような工夫ができると、計画全体がさらに良いものになるのではないかと思います。

■橋本達昌委員（社会福祉法人越前自立支援協会 児童家庭支援センター・子育て支援センター・里親支援機関・児童養護施設 一陽 統括所長）

発達障害等を有する子どもたちへの支援を、地元のお年寄りや大学生も巻き込み、地域ぐるみで展開していきたいというプロジェクト提案は、極めて明快であり、十分にリアリティを感じさせるものでした。おおいた子ども支援ネットの溢れんばかりのエネルギーが、孤立しがちな子どもやその家族を笑顔にしていくに違いないと確信しています。社会的養育の先進県である大分での「育ち合う場づくり」に大いに期待します。

■吉倉和宏委員（日本財団 常務理事）

これまでの業務実績とともに地域の方々との関わりの延長に、関係者の期待と課題に対応し計画されていると感じました。

子どもたちのワクワク感に地域の方々が集まる場所になるだけでなく、竣工後に更に子どもと建物、そして運営のノウハウを育てていく場所になることを願っています。

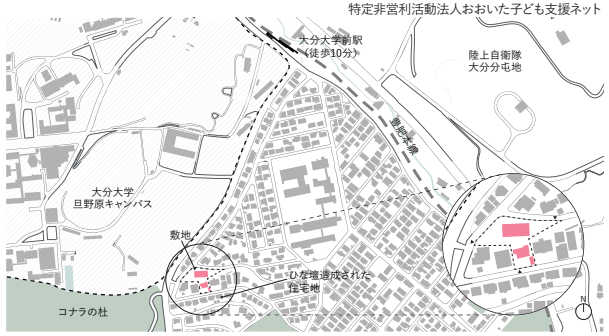
プロジェクト最終審査資料（工期・デザインは変更の可能性有）

地域でこどもを育み、
こどもが地域を育む

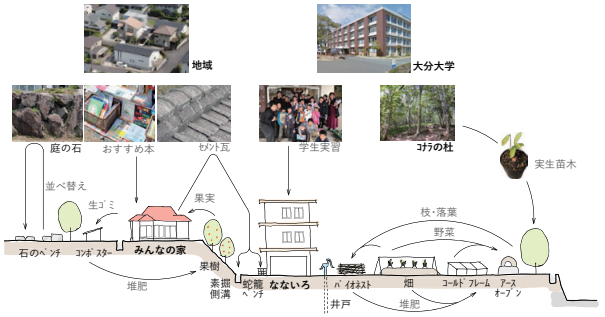
だんのはるオーガニックケアガーデン

特定非営利活動法人おおいた子ども支援ネット

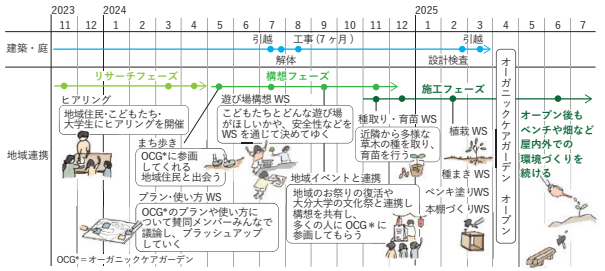
こどもたちの最善の利益と権利擁護を基盤にした包括的なこども支援事業を行う、私たちが考える「みらいの福祉」は育ち合う場づくりです。放課後等デイサービス**なないろ**に利用されてきたRC造の元修道院を耐震・断熱補強し、隣接する民家を**みんなの家**に改修し、母屋を食事会などができる土間キッチン、ガレージを地域住民が本を持ち寄るガーデンライブラリーに改修し、さらに外構の舗装をはがして植物を育て、収穫し、活用して循環させる**オーガニックケアガーデン**に再整備します。そのすべてを遊び場と学びの場に変えてしまうこどもたちに寄り添うように、保護者や地域住民、大学生たちが集い、庭仕事、調理と食事、読書などのふるまいが有機的に連鎖して、こどもを育むことが地域を育むことにつながっていきます。人と植物とまちが育ち合うオープンな庭が地域への愛着や誇りを醸成し、みらいの福祉の担い手を育むことを目指します。



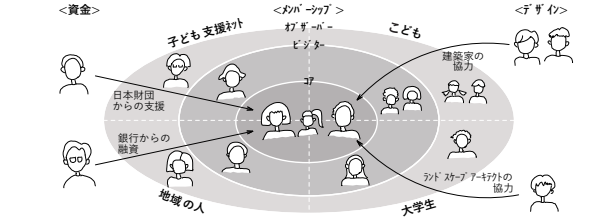
周辺敷地について 雛壇造成された住宅地にある旧ｻﾚｼﾞｵ修道会（1965年建築）は、青い目の修道士が開く英語教室として、地域住民に親しまれてきましたが、2014年以降は自立援助ﾎｰﾑや放課後等ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽとして活用されてきました。2016年に大分大学福祉健康科学部が新設され、ｹｱ現場での学生研修も始まりましたが、学生と地域住民の交流は未だ進んでいません。本計画は旧修道会と隣接する民家を併合した全体を地域交流の場とすることで、大学生や増え続ける空き家を地域ｹｱに組み込む試みです。



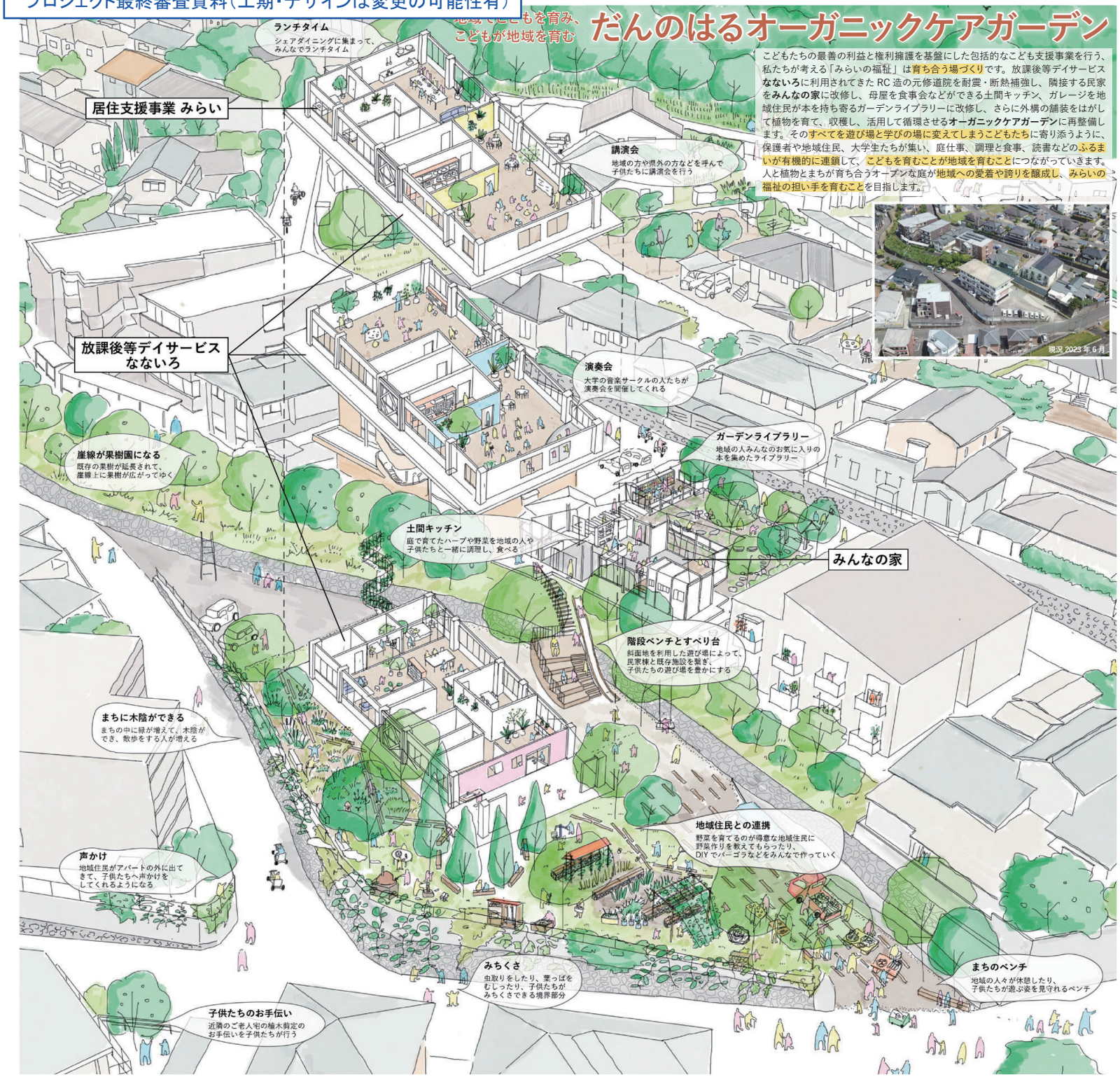
資源を活用した地域づくりとしてのオーガニックケアガーデン 大分大学の学生や地域住民が参画し、大学構内の森で実生した苗木、地域住民が持ち寄る書籍、民家の一部を解体した資材、庭石、井水といった地域にある資源が循環、活用されることにより、**OCG**は地域づくりの核になります。現在駐車場に敷かれているｱｽﾌｧﾙﾄをはがし、植物を育てることは、土中に潜在する微小な生命を活性化し、水と空気の循環を改善するとともに、蒸散効果による微気候を発生させ居住環境を酷暑から守ります。



OCGのプロセス ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ等を早期に実施するﾌﾛﾝﾄﾛｰﾃﾞｨﾝｸﾞ手法を取り、不測の事態が起きても遅延のないように進めます。提出後は、課題を洗い出し実施設計の熟度を高め、各種申請の準備を行います。採択後はｺｽﾄ調整、OCGの理念の共有、安全な施工計画に努めます。工事期間中は、地域ｲﾍﾞﾝﾄや大学がﾘｷｭﾗﾑに合わせて様々なﾜｰｸｼｮｯﾌﾟを企画し、各段階で多様な人々が関わることで誰もが愛着の持てる施設づくりに励みます。



OCGのﾒﾝﾊﾞｰｼｯﾌﾟ 全体を運営する資本は**なないろ**にあります。義務教育期のこどもたち20名、10名の2教室から、改修後は3教室体制にします。高齢単身世帯が増加する地域の方々の居場所になる**みんなの家**は大学と連携して運営し、学術的な知識と実践的なｽｷﾙの融合、義務感なく自由に参加できる学生活動により、地域ｹｱの循環を生みます。人々がそれぞれの得意を活かして、地域資源の活用に共同で取り組む体制は、主体的に関わるｺｱﾒﾝﾊﾞｰ、教わりながら参加するｵﾌﾞｻﾞｰﾊﾞｰ、体験を楽しむﾋﾞｼﾞﾀｰからなるｺﾋｰﾊﾞｽﾞ型のﾒﾝﾊﾞｰｼｯﾌﾟです。各々の事情で柔軟に関われる体制をつくります。これらすべての場所を有機的につなぐのはこどもたちです。

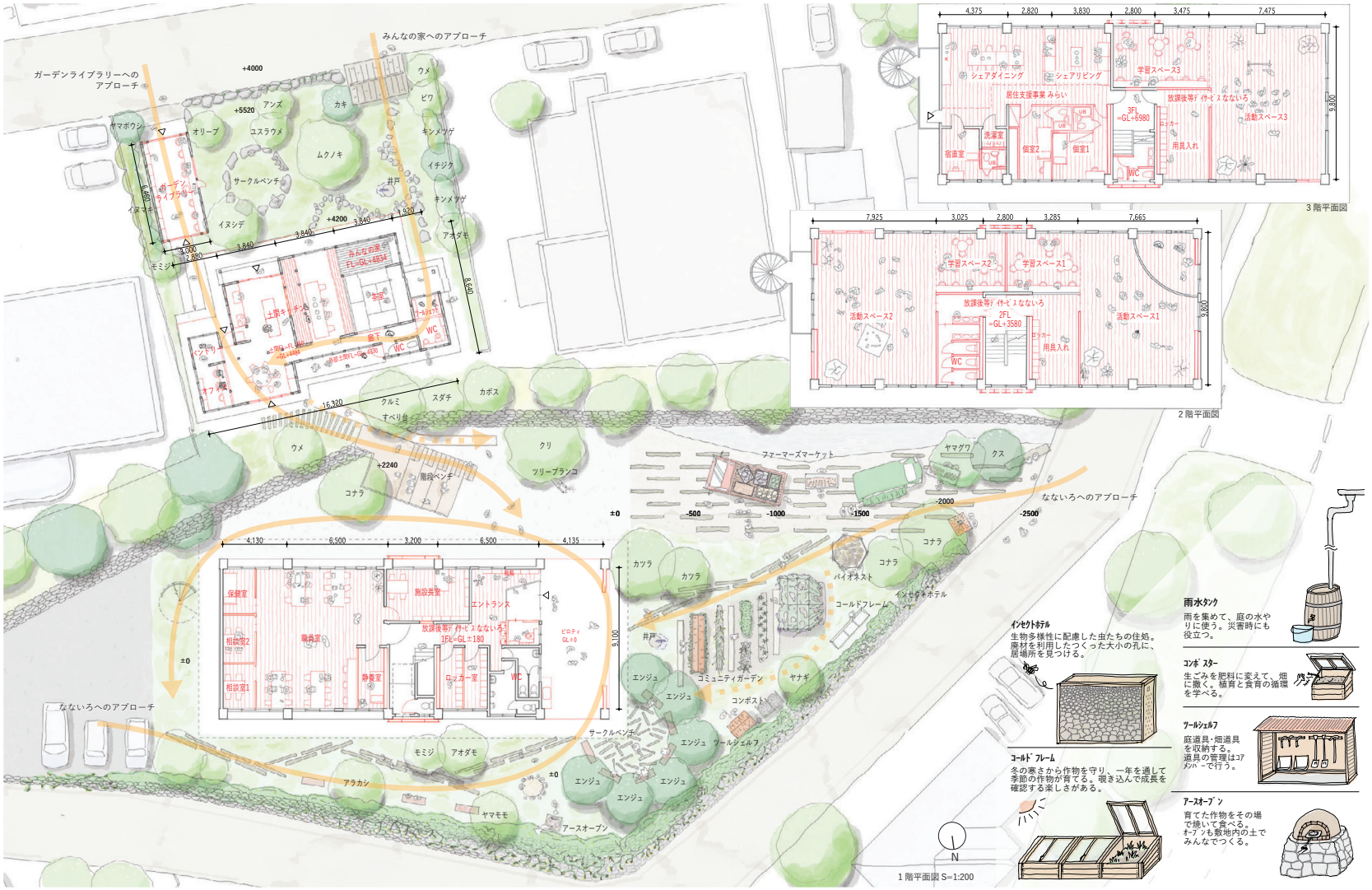


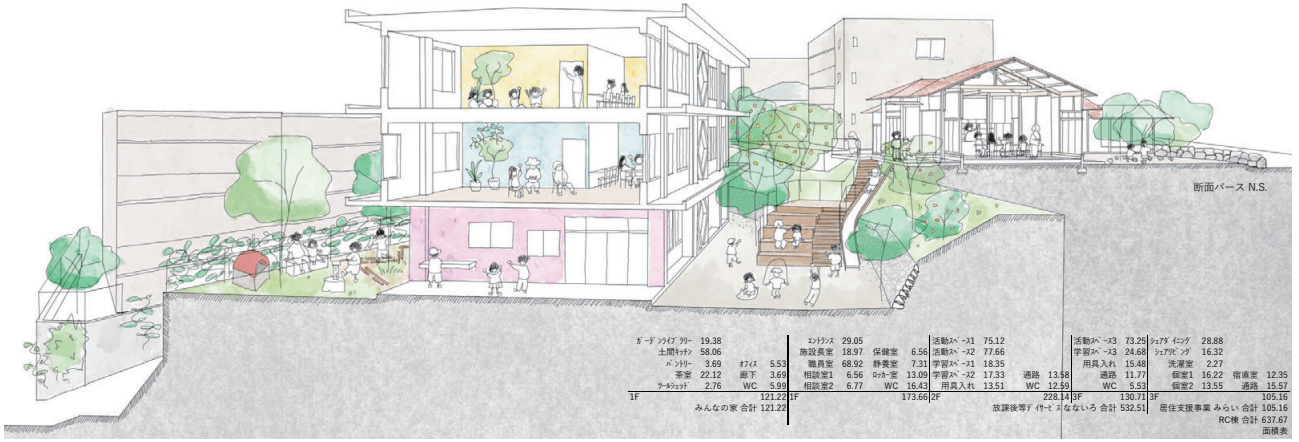
みんなの家の庭を、「見るための庭」から、多世代が集う庭へと改修する。外観では既存の石垣を継承しつつ、外から庭での活動の様子が分かるように視認性を確保する。庭では、かつて**景石だった庭石をベンチに設え直し**、木陰の下に集い、ライブラリーの本を読める場所をつくる。新しく**みんなで植える植物は新設する井戸水**で丁寧に育てられ、みんなで収穫し、楽しむ機会をつくってくれる。

土間キッチン みんなの家の大きなキッチンで、こどもたちと育てた野菜をこどもたちとともにわいわい調理し食べる**ファーム to テーブル**を実践。天井を外して小屋組を露出させ、農家の土間のような、庭とつながったおおらかな空間。残された畳の間は茶室。**空き家に大学生や地域住民が集い、まちづくりの話し合いの場になることが期待される。**

こどもたちの遊び場となっているこの場所では、既存の平地をできるだけキープしながら、**斜面に様々な遊びやイベントができるスタンド階段とすべり台**を設置することで、民家棟と既存施設棟の間における人の行き来を活発にする。斜面には**果樹を植栽**し、**果物の栽培・収穫・加工**を通じて、植物を育てる楽しみをみんなで分かち合う。

放課後等デイサービスなないろの前には、みんなで野菜を育てる**コミュニティ畑**と、**野菜のマーケット等を開催できる広場**をつくる。ここでは畑だけでなく、コンポストや道具小屋、アースオーブンなど農的なしつらえを少しずつ加えていくことで、**手間をかけ、循環の中で野菜を育てることの楽しさと学びを広げていく**。





ｶﾞｰﾃﾞﾝﾗｲﾌﾞﾗﾘｰ	19.38			ｴﾝﾄﾗﾝｽ	29.05			活動ｽﾍﾟｰｽ1	75.12			活動ｽﾍﾟｰｽ3	73.25	ｼｪｱﾀﾞｲﾆﾝｸﾞ	28.88
土間ｷｯﾁﾝ	58.06			施設長室	18.97	保健室	6.56	活動ｽﾍﾟｰｽ2	77.66			学習ｽﾍﾟｰｽ3	24.68	ｼｪｱﾘﾋﾞﾝｸﾞ	16.32
ﾊﾟﾝﾄﾘｰ	3.69	ｵﾌｨｽ	5.53	職員室	68.92	静養室	7.31	学習ｽﾍﾟｰｽ1	18.35			用具入れ	15.48	洗濯室	2.27
茶室	22.12	廊下	3.69	相談室1	6.56	ロッカー室	13.09	学習ｽﾍﾟｰｽ2	17.33	通路	13.58	通路	11.77	個室1	16.22
ﾌｰﾙｼｪﾙﾌﾞ	2.76	WC	5.99	相談室2	6.77	WC	16.43	用具入れ	13.51	WC	12.59	WC	5.53	個室2	13.55
1F			121.22	1F			173.66	2F			228.14	3F	130.71	3F	

宿直室	12.35	通路	15.57
共用入れ	105.16		
みんなの家 合計	121.22	放課後等デイサービスなないろ 合計	532.51
居住支援事業 みらい 合計	105.16		
RC棟 合計	637.67		

面積表

ガーデンライブラリー 本好きがおすすめの本を持ち寄ってつくる共同図書館。こどもたちや家族も、地域住民も、近所に下宿する大学生も来られる団欒の場。ガレージを耐震補修し、まちとみんなの家を繋ぐ動線を兼ねる。